

加賀見山田錦絵

初代 吉田玉男／談

森西真弓／記

〈出典：『吉田玉男文楽藝話』日本芸術文化振興会、平成19年9月〉

昭和三十一年四月、文五郎師匠は、旧皇族の東久邇家から「難波掾」の号を受領されました。師匠は明治二年生まれですから、当時満八十八歳。耳はちょっと遠くなっておられましたけど、お元気でした。とはいえ高齢なので、この頃から、出来るだけ体力的な負担を少なくするため、切場の一部だけに出来るようになっていました。

たとえば、この作品ではお初を持ち役になさっていましたが、昭和三十二年一月に道頓堀文楽座（後の朝日座）で上演された時は、「長局」の前半を弟子の亀松さんが持たれ、後半を文五郎師匠が担当される。それでも、師匠が舞台へ登場されるだけで、客席からは万雷の拍手です。同じように翌三十三年二月東京読売ホールで出た時も、文五郎師匠の出番は“烏啼き”と呼ばれる堀外からで、それ以前の、長局へ下がって来る尾上を迎えに行く「廊下」に始まり、使いを命じられ、あとに心を残しながら「どりゃ、ひと走り走ってこう」と出かける場面までは、私が勤めさせてもらいました。結局、お初はこれ一回だけで、切場を通して持ったことや「奥庭」に出たことは、その後もありません。因みにその読売ホール公演は、難波掾受領と伊達大夫改め七世竹本土佐大夫襲名披露的一幕があって、私も舞台に連なっています。津大夫（四世）さんの司会、先代綱大夫さんの口上で、人形部は下手に文五郎師匠の一門一亀松さん、玉五郎さん、文昇君、文雀君、上手に客分として、玉助さん、二世栄三さん、玉市さん、そして私が並びました。続いて同ホールで二の替り公演があり、今度は「寺子屋」（『菅原伝授手習鑑』）で千代の前半を私、白装束になっての“いろは送り”以降を文五郎師匠が遣われました。

こういう特殊な事情で、私の場合はお初や千代を持っただけですが、どちらの役もそれまで足や左の経験はありません。そこで、文五郎師匠の左を持っていた文雀君に要点や段取りを聞いて、あとは、お初らしくなるよう、自分で、ああかこうかと工夫してみました。たとえば足や左をやっていないなくても、人形遣いである以上、どんな役にでも対応できて当然なのです。そのためには、若い時分に舞台の袖からいろいろな役をしっかりと見ておくことが大切です。

お初は、よく気がつき、まめまめしく働く娘です。ただし、「長局」の前半、ことに「どりゃ、お薬を見てこう」と襖を閉めて下手の部屋へ入ってからは、上手の尾上の邪魔にならない演技をする。神棚にお灯明を上げたり、火を熾して薬を煎じたり、用事は多いのですが、その間、浄瑠璃の本文はずっと尾上の心情を語っている。この場合は、あくまで尾上が中心で、お初が目立つようではいけない。心得事です。お初の見せ場は、後半、お使いの途中で書置を発見し、急いで戻って来て、尾上の亡骸を見つけた後のクドキに、ちゃんと用意されているのですから。大詰の「奥庭」は、「長局」から一転して変化のある場面で、ここは、お初

も岩藤もたっぷりと演じればいい。

岩藤は一度だけ、これまた足や左を通過しないまま、昭和四十三年十月国立劇場で通し上演された際に勤めています。この時は、栄三さんの尾上、紋十郎さんのお初という配役。「草履打」の床は、先代綱大夫さんの岩藤、咲大夫君の尾上、父子による掛合でした。

この場は岩藤が主役のようでもあり、二世栄三、紋十郎の両先輩に伍して、ということもありましたが、たまにいじめ役を持つのは楽しいものですよ。因会時代には、長く娘役を遣われた文五郎師匠、座頭役の玉助さん、立女形格に栄三さんがおられたので、私には二枚目の役が回ってきた一方で、結構たくさん、憎まれ役や敵役もありました。立役では『夏祭浪花鑑』の義平次を早くから持っていますし、「朝顔日記」(『生写朝顔話』)の岩代多喜太、「阿古屋琴責」(『壇浦兜軍記』)の岩永左衛門、女形では、『伊勢音頭恋寝刃』の万野、『伽羅先代萩』の八汐、「中将姫」(『鵲山姫捨松』)の岩根御前など。こうやって並べると、岩藤も含めて、どういうわけか「岩」のつく名前が多いですね。ごつくて怖そうなイメージ？ 芝居の中だけで、実際はそんなことないのしょうけれど(笑)。あまり動かない役や辛抱役ばかり続いた時に、悪い人でもいいから趣きの変った役がくると、気分転換になります。まあ、そればかり重なっても困りますけど……。そうそう、昭和二十五年六月四ツ橋文楽座で、「本蔵下屋敷」(『増補忠臣蔵』)の伊浪伴左衛門に、岩代、岩永と、三役とも敵役というのがありましたよ。これはまた逆に気分が変わらない。

話を戻しましょう。尾上は、足、左と段階を経て勉強しました。この役は、基本をきちんと身につけていないと、遣いこなせない。足は栄三師匠にみっちり仕込まれました。特に難しいのは、尾上が次の間にいるお初の様子を窺う場面。忍び足で下手へ進み、襖を少し開けるところで、ちょっと足を上げる。ご承知のように女形の人形には足が吊ってありませんので、曲げた足を表わすために足遣いが自分の拳で膝の形を作る。その位置がなかなか定まらない。高すぎても低すぎてもいけない。巧く出来ていないと、本番中に栄三師匠が「ううんん」と唸り声を出されるのです。舞台から降りてくると、「高すぎるやないか」と怒られる。興行中に何度か注意され、絞られました。

尾上を役として初めて手がけたのは、昭和五十七年五月国立劇場です。文楽の本興行での最初はそうなのですが、実はこれより早く、三十二年一月に、女流義太夫の名手だった竹本三蝶さんが「長局」を人形入りで語られた時、私、尾上を持っているんです。いわば事実上の初役。昔は、女流や素人義太夫の方たちの公演に、人形遣いがゲスト出演することがよくあった。そんな時は若手が呼ばれ、こちらとしてもこうした仕事は勉強の糧となりました。

「草履打」の尾上は、岩藤に責め立てられても、ひたすら耐える。ただ、岩藤が刀を抜くに及んで、さすがに堪え切れず、尾上もいったん刀に手をかけますが、思い止まります。この後、草履を膝に乗せられ、拭けと命じられる。尾上は涙を見せまいとやや仰向き、臉を閉じます。さらに追い討ちをかけるように、岩藤が草履で尾上の額を打つ。すると頭に掛けてあった角隠しが外れ、前髪の左右から垂れたシケが現れる。これは両ジケとって、尾上の哀れさを強調する効果があります。同じシケでも、『妹背山婦女庭訓』の求馬のような二枚目

の場合は色ジケと呼ばれ、その名の通り色気を描出しています。幕切れ、尾上は懐紙で涙を拭い、草履をじっと見込んで、駕籠に寄りかかる。腰元たちの前で辱めを受け、死ぬ決心を固めます。ただ、あくまで「草履打」の間は決意を内に秘め、外へは表さない。「長局」になって「待つ間もとけし長廊下」で、上手から懐手をして俯き加減に登場する時には、すでにその覚悟が出来ています。お初が出してくれた履き替えの草履を見て、一瞬ハツとなりますが、悟られないように心を取り直し、下手へ入る。

道具が替わって尾上の自室。お初が心配して『仮名手本忠臣蔵』の話を持ちかけます。「あの師直づらの憎さ憎さ」では尾上も無念の思いが込み上げ、見台を前へ倒しかけて、また我に返る。その後、お初から煙管を受け取りますが、吸いません。煙草どころではないのです。今度は煙管を用いて、なおも岩藤への恨みを滲ませる。見台、煙管、さらに脇息と、尾上の心理描写のために小道具が巧みに使い分けられています。お初が立ち去ると、「あとに尾上は胸せまり、……明日はなき名を白紙に」で、書置を認める場面。手箱にはいろいろな物が入っています。まず巻紙、続けて袱紗に包まれた草履、持ち運び用の文箱、結び目にする紙繕り、母からの手紙、岩藤の密書。開演前にこれらを揃えるのは、若いかいしゃく（介錯）人の役目です。入れ忘れてたりすると大変ですので、初日からしばらくは私も確認します。

手箱の中の品物を使って順に芝居をするわけですが、悔しさ、悲しさ、健気なお初への感謝の念、やさしい母へ先立つ不孝を詫びる気持ちなどを、浄瑠璃の文句に合うように、同じ振りが重ならないように、品を保って、しかも手際よく表現していく。その中で、お初が出かけた後に礼を言う「こりゃ忝いぞや嬉しいぞや」では、膝を立てて、正面へ回した顔をさらに横へ向ける、ネジと呼ばれる型を見せます。また、最後に母を気遣って「必ずお許しあそばせ」と泣き崩れるところにも動きがある。ここらは大夫さんにたっぷり語ってほしいところですね。

部屋へ戻ってからの尾上は、終始、憂いに沈んだ様子を描写し、さらに、お初に気取られまいと神経を配らないといけないので、息を抜けません。舞台の上には尾上とお初の二人だけ、お初が外出した後は尾上一人になってしまいますので、隙を見せることが出来ない。おまけに、女形の大役の中でも尾上には、『伽羅先代萩』の政岡や『絵本太功記』の操のようなクドキがありません。全体的に小さなしぐさの積み重ねです。政岡も同様にしんどい役ですけど、千松が死んでからは派手に動きますから、まだしも楽なのです。

とはいえ、どんな仕事でもそうでしょうが、難しいからこそ、それをやりこなすところに面白さが生まれてくる。尾上は、充分にしおおせることが出来た時、見て下さるお客様に堪能していただけるのと同時に、人形遣い自身も充実感を味わえる、やり甲斐のある役です。